韓愈の初期文章作品に見られる典故表現

—『莊子』との関連を中心に—

渡辺 志津夫

はじめに

中唐の文人・韓愈（七六八—八二四）は「駢文」に対して「古文」という新しい文体を確立したことで知られるが、その過程ではさまざまな工夫がなされたはずである。中でも四字句・六字句を中心とする駢文の「型」を破りながらも、「読ませる」文章を書くために、中国古典文学の代表的な修辞法の一つである典故表現の効果的な使用は重要な位置を占めていたと思われる。

韓愈の作品についての注釈書は、宋代より現在に至るまで数多く出版されているが、典故の指摘についてはまだ不十分であり、創作上の工夫を十分に究明するには至っておらず、作者の真意に迫り切れていない点がある。

また韓愈の古文家としての名声が定着するのは後年のことであるため、古文確立の準備段階にあたる初期の文章は十分に検討されてこなかったように思われる。

韓愈は貞元八年（七九二）に二五歳で進士に及第するが、その後経済的に困窮する時期が続く。「読ませる」

文章を書いて有力者の目に止まることは韓愈にとって切実な問題であり、この時期の作品には文章創作上の工夫がよく現れているはずである。

そこで本稿では、韓愈の初期文章作品を対象として、従来指摘されていない典故を新たに指摘しながら、作品の新たな読みの可能性について検討する。特に典故については『莊子』との関わりに注目すべき点があるように思われる。またあわせて後の韓愈の文学論との関連についても考察してみたい。

一、初期の文章作品

作品の繫年は『韓愈全集校注』^②により、貞元十一年（七九五）までの文章作品を対象として検討を加えた。韓愈は翌貞元十二年（七九六）に宣武軍節度使・董晋の幕僚になっており、そのことで経済的に安定し、精神的にも一つの区切りになっていると思われるからである。

対象となる作品は次の二十四篇である。^③「上張徐州薦

薛公達書」(貞元四年)、「河中連理木頌」「猫相乳」「上賈滑州書」(以上貞元六年)、「明水賦」「瘞硯銘」(以上貞元八年)、「省試顔子不式過論」「争臣論」「上考功崔虞部書」(以上貞元九年)、「応科目時与人書」「与鳳翔邢尚書書」「送齊暉下第序」「贈張童子序」「祭鄭夫人文」「李元賓墓銘」(以上貞元一〇年)、「感二鳥賦」「画記」「上宰相書」「後十九日復上書」「後廿九日復上書」「答侯繼書」「答崔立之書」「省試學生代齋郎議」「祭田橫墓文」(以上貞元一一年)。

これらの中で、科挙の答案である「明水賦」「省試顔子不式過論」「省試學生代齋郎議」^④と、韻文である「感二鳥賦」を除いた二十篇を見ると、有力者に対して書かれた作品が実に半数の一〇篇を占めている。これは冒頭で述べたように、当時の韓愈が経済的に困窮しており、有力者の引き立てを求めのに急だった事情を如実に反映している。そして文章創作上の工夫も、より多くこれらの作品中に現れていることが予想される。具体的には有力者の人徳を顕彰するくだりであったり、また自分がいかに困難な状況にあるかを訴えかける部分であったりするだろう。

二、修辭上の工夫

本稿では文章創作上の工夫を大きく「修辭上の工夫」と「典故表現」に分け、典故表現をさらに「經書に基づ

くもの」と『莊子』に基づくもの」に分けて検討を加える。引用した典故で既に指摘があるものは、指摘が一番適切と思われる注釈書を注①のアルファベットによって示し、新たに指摘した典故は冒頭に「*」を付して区別した。

(1) 典故がある言葉と日常的な言葉の組み合わせ初期の文章作品に見られる修辭上の工夫として、まず指摘できるのは、口語的語彙を用いていることである。^⑤

今所病者在於窮約。無僦屋・賃僕之資、無縹袍・糲食之給。(今病くわしむ所の者は窮約に在り。僦屋・賃僕の資無く、縹袍・糲食の給無し。)(「上考功崔虞部書」)

枯槁・沈溺魁閎・寬通之士、必且洋洋焉動其心、峨峨焉纓其冠、于于焉而來矣。(枯槁・沈溺せる魁閎・寬通の士、必ず且つ洋洋焉として其の心を動かし、峨峨焉として其の冠に纓し、于于焉として来らん。)

(「上宰相書」)

「上考功崔虞部書」では「僦屋賃僕」と「縹袍糲食」が對の位置に置かれている。「縹袍」(綿入れの衣服)、「糲食」(粗末な食べ物)は、それぞれ經書に見える言葉である。

(H)子曰、「衣敝緼袍、与衣狐貉者立而不恥者、其由也与。」(子曰く、「敝れたる緼袍を衣て、狐貉を衣る者と立ちて恥じざる者は、其れ由か。)(『論語』子

(罕)

* 雖蔬食・菜羹、未嘗不飽。蓋不敢不飽也。「趙岐注」
蔬食、糲食也。(蔬食・菜羹と雖も、未だ嘗て飽か
ずんばあらず。蓋し敢へて飽かずんばあらざるなり。)

「趙岐注」蔬食は、糲食なり。(『孟子』万章下)

「縵袍」「糲食」と対になる「儼屋」(部屋を借りる)、

「賃僕」(使用人を雇う)は、これより古い用例を見つ
けることができず、当時の日常的な言葉だったと思われ
る。「上宰相書」の「枯槁沈溺」と「魁閎寛通」は対句
ではないが、「枯槁」(世俗から遠ざかっている隠者)、
「沈溺」(世俗の中に身を置いていてる隠者)はともに『莊
子』をふまえた表現であり、二語で「すべての隠者」の
意で用いたものであろう。

* 兵革之士樂戰、枯槁之士宿名。(兵革の士は戦を樂

しみ、枯槁の士は名を宿る。)(『莊子』徐無鬼)

* 方且与世違而心不屑与之俱。是陸沈者也。(方且に

世と違ひて心は之と俱にするを、屑しとせず。是れ

陸沈する者なり。)(『莊子』則陽)

「枯槁」「沈溺」と対になる「魁閎」(度量が大きい)、

「寛通」(博学)は古い用例が見られず、やはり当時の

日常語であると思われる。「上考功崔虞部書」では經書
が日常語と対になり、「上宰相書」では『莊子』が日常
語と併用されている。韓愈の文章創作上の工夫において、
經書とともに『莊子』が重要視されていることが窺える。

(2) 同一語の反復

「猫相乳」では、死にそうな母猫の声を聞きつけた別
の猫が子猫を救いに行く場面を次のように描写してい
る。

若聞之、起而若聽之、走而若救之、銜其一置于其棲、
又往如之、反而乳之若其子然。(之を聞くが若く、
起ちて之を聴くが若く、走りて之を救ふが若く、其
の一を銜みて其の棲に置き、又往きて之の如くして、
反りて之に乳すること、其の子の若く然り。)

「ごとし」という言葉を連用して猫の一連の動作を表現
しており、動作に流れが生まれている。猫が実際にこの
ようなことをするとは考えにくく、ここでは「ごとし」
を連用することで、想像をうまく表現していると言える。

また対句の字数を変えてリズムを変えながらも、同一
語を反復させることで句としての一貫性を保つ例が見ら
れる。たとえば「画記」では、「○○者：人」(○○す
る者：人)という形が字数を変えながら、二箇所倒置
を挟んで三十二句にわたって続き、^⑥「後廿九日復上書」
では、「皆已」を用いた、それぞれ字数を異にする句が
九回続く。

(3) リズムの変化

前項で取り上げた「画記」「後廿九日復上書」の他に
も、対句の字数を変えてリズムを変化させる例は随所に
見られる。^⑦

君子小人之所憫笑、天下之所背而馳者也。(君子小人の憫笑する所、天下の背きて馳する所の者なり。)

(「答崔立之書」)

「君子小人」と「天下」は字数を変えることによつてリズムを変え、「憫笑」と「背而馳」は助字「而」を挿入することで対句の字数を崩してリズムを変えている。また「李元賓墓銘」は、叙述を極度に簡略化することによつて悲哀の感情を際立たせる効果をもたらしていることが指摘されている。^⑧

従来の形式を打破するこれらの試みには、新しいものを作り上げていこうとする韓愈の強い意欲が感じられる。

三、典故表現

韓愈の文章について、典故に着目した表現上の工夫は、従来あまり詳しく指摘されていないようである。^⑨ 本稿では韓愈の初期文章作品において典故が積極的に利用され、中でも経書と『莊子』が大きな比重を占めていること、ならびにそれが韓愈の文章を読み解く上で重要なポイントになっていることを明らかにしたい。経書と『莊子』の両者が典故として使われているものは、ふさわしいと思われる方に挙げた。

(1) 経書に基づく典故表現

「答崔立之書」は、博学宏詞科の試験に連続して落第した韓愈が、親しい友人の崔立之から手紙で激励されたことに対して書かれた返信である。その中で韓愈は心中を吐露し、もしも時勢に関する自分の献策が入れられず、役職を得ることができなかつた場合は、と仮定して、次のように述べる。

猶將耕於寛閑之野、釣於寂寞之浜。(猶ほ將に寛閑の野に耕し、寂寞の浜に釣らんとす。)

広く静かな土地で耕作し、ひっそりとした水辺で釣りでもしようと言う。この句は韓愈が世間から遠ざかつて著述に打ち込む意思を表明したものと解釈されている。従来指摘されていないが、「耕於寛閑之野」は『孟子』をふまえた典故表現である。

* 伊尹耕於有莘之野、而樂堯舜之道焉。(伊尹は有莘の野に耕して、堯舜の道を楽しむ。)(『孟子』万章上)

伊尹が殷の湯王に仕える前に莘の地で耕作し、隠居して堯舜の道を楽しんでいたことを言う。「釣於寂寞之浜」は呂尚(太公望)が渭水で釣りをしていたことを指し、たとえば次の例が挙げられる。^⑩

呂尚蓋嘗窮困、年老矣、以漁釣奸周西伯。(呂尚蓋し嘗て窮困し、年老いしとき、漁釣を以て周の西伯に奸む。)(『史記』齊太公世家)

「耕釣」は伊尹・呂尚の故事をふまえた隠遁を意味する言葉として韓愈以前の詩文に用いられており、「耕於寛

閑之野、釣於寂寞之浜」の句を見れば、当時の知識人は伊尹と呂尚を連想したはずである。^⑧

この句のポイントは、韓愈が表向きは隠遁と言いながら、自分自身を伊尹や呂尚になぞらえている点にある。つまり、今はいったん身を引くが、ゆくゆくは宰相になつてやる、という韓愈の秘めた野望がこの句には潜んでいるのである。後に詳しく検討するが、「答崔立之書」はこの引用を受けて「微足下、無以發吾之狂言。」（足下微かりせば、以て吾の狂言を發すること無からん）と述べて書簡を終える。著述に打ち込むことが韓愈にとつて「狂言」ではないことは明らかであり、このように解釈してはじめて「狂言」の語が生きてくる。『孟子』の典故をふまえなければ、韓愈の秘めた野望というこの句の真意を読み解くことができない。

「上考功崔虞部書」は、博学宏詞科を受験した時に、韓愈を合格者として推薦してくれた崔元翰に対して書かれた書簡である。この中で韓愈は、自分の答案を高く評価してくれた崔元翰を次のように称える。

執事者所守異於人人、廢耳任目、華実不兼。（執事の者の守る所は人人に異なり、耳を廢し目に任せて、華実兼ねず。）

当時の科擧は事前の評判が合否を大きく左右した。評判が立つということは有力者の後ろ盾があることを意味する。しかし「執事殿（＝崔元翰）の考え方は他の人々と異なり、耳をふさぎ、自分の目を信じて、評判と実力を

一緒くたにしなかった。」そのため崔元翰は韓愈を含む三名を合格者として推薦したのだが、うち二名は評判通りに合格したのに対し、「所不言者（言はざる所の者）」、すなわち事前に評判にならなかつた韓愈は落第してしまふ。この間の経緯は次のように述べられる。

三人之中、其二人者、固所伝聞矣。華実兼者也。果竟得之、而又升焉。其一人者、則莫之聞矣。実与華違、行与时乖、果竟退之。（三人の中、其の二人の者は、固に伝へ聞く所なり。華実兼ねる者なり。果して竟に之を得て、又升る。其の一人の者は、則ち之を聞くこと莫し。実は華と違ひ、行ひは時と乖き、果して竟に之を退く。）

崔元翰を称えるくだりを含め、この作品は「華実不兼」「華実兼者」「実与華違」と、「華」（評判）と「実」（実力）との対比が軸になって論が展開されていく。「華と実の対比」というモチーフは、『春秋左氏伝』に「華而不実」（華にして実ならず）という形で用いられて以来、「華而不実」で「うわべは華やかだが実質が伴わない」の意味が定着している。

*華而不実、怨之所聚也。（華にして実ならざるは、怨みの聚まる所なり。）（『春秋左氏伝』文公五年）
韓愈は『春秋左氏伝』をふまえた上で、二人の合格者は「華実兼ねる者」、すなわち評判と実力を兼ね備えていたのに対して、評判にならなかつた自分は「実は華と違ふ」、実力が評判と食い違つてしまった、と言っている

のである。「華而不実」(『春秋左氏伝』) ↓ 「華実不兼」(崔元翰) ↓ 「華実兼者」(二人の合格者) ↓ 「実与華違」(自分自身) と、経書に典故がある言葉をふまえながら、それを自在に組み替えるという、十分に技巧を凝らした表現になっている。また従来は「うわべの華やかさと実質」という、一つの物の二つの側面を表していたのに対して、ここでの「評判」は外から与えられるものであり、従来の意味を変えて用いていることが分かる。

試験に落ちた場合、たとえどんなに自信があつたとしても、表向きは自分が未熟だったと言うのがふつうだろうが、第三者の目に触れる手紙の中で「自分には合格するだけの実力がある。評判が足りなかっただけだ」と言つてのけてしまうところに韓愈の人柄が垣間見えるようである。

「後十九日復上書」は自分の窮状を訴えて引き立てを求めた書簡である。この作品では「水火を踏む」という典故表現を軸にして論が展開されていく。

愈聞之、踏水火者之求免於人也、不惟其父兄弟之慈愛、然後呼而望之也。(愈之を聞く、水火を踏む者の免れんことを人に求むるや、惟其の父兄・子弟の慈愛にして、然る後に呼びて之を望むのみならずなるなり。)

「水に溺れ、焼け死にそうになっている人が助けを求めるときは、相手を選ばないものだ」という一般論の形で話が切り出される。「水火を踏む」という表現は『論語』

に典故が求められることが指摘されている。

(P) 子曰、民之於仁也、甚於水火。水火吾見踏而死者矣。未見踏仁而死者也。(子曰く、民の仁に於けるや、水火よりも甚だし。水火は吾踏みて死する者を見るも、未だ仁を踏みて死する者を見ざるなり。)(『論語』衛霊公)

続いて、自分は学問に励んできた結果、「水火を踏む」状態に立ち至ってしまったことを述べる。

愈之彊学力行有年矣。愚不惟道之險夷、行且不息、以踏於窮餓之水火。(愈の学を彊め行ひを力むること年有り。愚にして道の険夷を惟はず、行ひて且つ息まず、以て窮餓の水火を踏む。)

「水火を踏む」という表現は、『論語』では単に「水に溺れたり、焼け死にそうになる」という意味だったものが、後に「命の危険を顧みない」「みずからの意志で水に踏み込んでいく」という、みずから積極的に危険に踏み込んでいく意味で用いられるようになる。

* 故烈士……流於川谷、不避踏水火。(故に烈士は：川谷に流るるも、水火を踏むを避けず。)(『韓非子』忠孝)

* 此由禽鹿少見馴育、則服従教制、長而見羈、則狂顧頓纓、赴踏湯火。(此れ由ほ禽鹿の少くして馴育せらるれば、則ち教制に服従し、長じて羈がるれば、則ち狂顧し纓を頓て、湯火に赴き踏むがごとし。)

(『文選』卷四三、嵇康「与山巨源絶交書」)

韓愈の場合はみずからの意志で困難に立ち至ったことは明らかで、用い方としては『韓非子』・嵇康の書に連なる。しかしこれでは相手の同情は得られないので、さらに次のように続ける。

有観溺於水而熱於火者、有可救之道、而終莫之救也。

閣下且以為仁人乎哉。(水に溺れ火に熱かるる者を観ること有り、之を救ふべき道有れども、終に之を

救ふこと莫きなり。閣下且つ以て仁人と為さんか。)

「閣下は、溺れている人を助けられない者を仁者だと思われませんか」と訴えかける表現にも典故がある。

(P) 与其有事、則褰裳濡足、冠挂不顧。人溺不拯、則非仁也。(其の事有るに与りては、則ち裳を褰げ足を濡らし、冠挂るとも顧ず。人溺れて拯はざるは、

則ち仁に非ざるなり。)(『後漢書』崔駰伝)

ここでは「溺於水而熱於火」と言うだけで、「踏」の字が見えなくなっていることに気づかなければならない。

ここで韓愈は宰相の同情を引くために、「溺れたり焼け死にそうな人を救わない」点だけに焦点を絞って、「踏む」という表現を注意深く外しているのである。「溺れたり焼け死にそうになる」(『論語』) ↓ 「みずからの意志で水火に踏み込む」(『韓非子』・嵇康・韓愈) ↓ 「踏」の字を外す(韓愈)と、『論語』に基づく言葉を用いながら、ここでも自在に形を変えて窮状を訴えている。

「水火を踏む」の典故に『論語』を挙げるだけでは、この作品に込められた韓愈の苦心を読み取ることができな

い。

「上賈滑州書」は、当時の義成軍節度使・賈耽に引き立てを求めた書簡である。その末尾で、相手に判断をゆだねるくだりを次のように表現する。

与之進、敢不勉。与之退、敢不從。進退之際、実惟閣下裁之。(之が進むことを与さば、敢へて勉めざらんや。之が退くことを与さば、敢へて從はざらんや。進退の際、実に惟閣下、裁せよ。)

これは『礼記』の次の表現をふまえていると思われる。

* 見父之執、不謂之進、不敢進。不謂之退、不敢退。

(父の執を見るときは、之に進めと謂はざれば、敢へて進まず。之に退けと謂はざれば、敢へて退かず。)

(『礼記』曲礼上)

* 先生与之言則對、不与之言則趨而退。(先生之と言はば則ち對へ、之と言はざれば則ち趨りて退く。)

(『礼記』曲礼上)

お引き立ていただけるとかどうかは閣下のお心次第です、と述べるのに、『礼記』の語句とリズムを共にふまえた表現になっている。

経書に基づく典故が作品の構成にまで及ぶ例としては「争臣論」と「上宰相書」がある。「争臣論」では『周易』蠱卦上九と蹇卦六二の爻辞を組み合わせ、また「上宰相書」では『毛詩』小雅「菁菁者莪」序を引いて巧みに議論を展開させている。

(2) 『莊子』に基づく典故表現

韓愈は「送孟東野序」(貞元一七年作)において、過去のすぐれた文学者の一人として莊子を挙げ、「進学解」(元和八年作)では、韓愈が模範とした古典の中に『莊子』を挙げている。従来はこれらを根拠に、韓愈と『莊子』との関連の可能性について推測するにとどまり、具体的な検討はなされていない。本稿では具体例を挙げながら、韓愈の初期文章作品において『莊子』が効果的に用いられていることを指摘して、韓愈が早い段階から『莊子』の文章表現や着想を積極的に取り入れていることを明らかにしたい。

「猫相乳」は、韓愈のパトロンだった馬燧の飼い猫が慈愛あふれる行いをしたことから説き起こして、馬燧の人徳を称えた作品である。その書き出しは次の通り。

司徒北平王家、猫有生子同日者、其一死焉。有二子飲於死母。(司徒北平王の家に、猫の子を同日に生む者有りて、其の一死す。二子有りて死母に飲む。)

一見すると何でもない書き出しのようだが、「有二子飲於死母」は『莊子』の典故をふまえている。

* 仲尼曰、丘也嘗使於楚矣。適見豚子食於其死母者。

(仲尼曰く、丘や嘗て楚に使ひせり。適たま豚子の其の死母に食む者を見たり。)(『莊子』徳充符) 続いて猫の行為が述べられ、その慈愛あふれる行いを馬燧の人徳に結びつけて次のように述べる。

夫猫、人畜也。非性於仁義者也。其感於所畜者乎哉。

北平王牧人以康、伐罪以平、理陰陽以得其宜。国事既畢、家道乃行、父子、兄弟、雍雍如也、愉愉如也。視外猶視中、一家猶一人。夫如是、其好感召致、其亦可知矣。『易』曰、「信及豚魚」、非此類也夫。(夫れ猫は、人に畜はるるものなり。仁義を性とする者に非ざるなり。其れ畜ふ所の者に感ずるか。北平王は人を牧ひて以て康くし、罪を伐ちて以て平らげ、陰陽を理めて以て其の宜しきを得。国事既に畢りて、家道乃ち行はる。父、父たり。子、子たり。兄、兄たり。弟、弟たり。雍雍如たり、愉愉如たり。外を視ること猶ほ中を視ることく、一家猶ほ一人のごとし。夫れ是の如くんば、其の感召致する所、其れ亦知るべし。『易』に曰く、「信、豚魚に及ぶ」と。此の類に非ずや。)

ここでは馬燧の人徳を称える描写に、経書に見られる言葉が多用されている点が注目される。具体的には次の通りである。

- 国事 (『礼記』喪服大記「君言王事、不言国事」)
- 家道 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」) ○ 父子 (『周易』兄弟象「兄、弟、夫、婦、而家道正」) ○ 父子 (『周易』兄弟象「兄、弟、夫、婦、而家道正」) ○ 父子 (『周易』兄弟象「兄、弟、夫、婦、而家道正」)
- 愉愉如也 (『論語』郷党「私覲愉愉如也」)
- 雍雍如也 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 信及豚魚 (『易』「信及豚魚」)
- 仁義 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 感召 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 理陰陽 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 宜 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 康 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 平 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 得 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 畢 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 行 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 視 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 猶 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 視 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 中 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 猶 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 一 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 人 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 畜 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 性 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 於 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 仁 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 義 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 也 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 其 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 感 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 於 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 所 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 畜 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 者 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 乎 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)
- 哉 (『周易』家人象伝「父父、子子、兄兄、弟弟、夫夫、婦婦、而家道正」)

伝を骨格として、經書に見られる言葉をちりばめて構成されているのである。『莊子』の典故を見逃すと、この作品の骨格を見落とすことになってしまう。

「答崔立之書」は、前項で取り上げた「猶將耕於寬閑之野、釣於寂寞之浜」を受けて、次の言葉で書簡を締めくくる。

微足下、無以發吾之狂言。(足下微なかりせば、以て吾の狂言を發すること無からん。)

君だからこそこんな馬鹿げたことが言えるのだ、と述べるこの一文は、次の二つの典故をふまえている。

* 微管仲、吾其被髮左衽矣。(管仲微なかりせば、吾其れ髮を被り衽を左にせん。)(『論語』憲問)

* 夫子無所發予之狂言而死矣夫。(夫子 予を發く所の狂言無くして死せるかな。)(『莊子』知北遊)

当時の知識人が「微足下」という言葉を目にすれば、当然『論語』を思い浮かべ、聖人・儒家といった方向に連想が働いたはずである。それに対して聖人・儒家とはいわば正反対の『莊子』が組み合わされることで、当時の人は大きなギャップを感じたのではないだろうか。韓愈の初期文章作品において、このような面白みを出すのに『莊子』は大きな役割を果たしているようである。この二つの典故と、そこから生じる面白さを読み取らないと、この一文の真意を酌み取ったことにはならないだろう。

「画記」は、韓愈が非常に気に入っていた絵画を他人に譲るに当たって書かれたもので、はじめにその絵に描

かれている内容を列挙するような形で書きつづり、最後に絵を入手した時の様子と、手放すことになった経緯を述べた作品である。その修辭上の特徴については拙論で述べた。ここでは作品中に經書に見られる言葉が数多く見られること、『莊子』齊物論のリズムをふまえた一段があること、『莊子』馬蹄の言葉を引用する際に、原文の語順を逆転させて読みの可能性を広げていること等を指摘した。

「上宰相書」に「枯槁・沈溺魁閎・寬通之士」という表現が見え、「枯槁」「沈溺」が『莊子』を典故としていることは、本稿二の(1)「典拠のある言葉と日常的な言葉の組み合わせ」においてすでに述べた。

「応科目時与人書」は、韓愈が博学宏詞科を受験するにあたり、有力者(誰かは不明)の助力を得るために書かれた書簡である。その書き出しは次の通り。

月日、愈再拜。天池之浜、大江之瀆、曰有怪物焉。蓋非常鱗凡介之品彙匹儔也。其得水、變化風雨、上下于天不難也。(月日、愈、再拜。天池の浜、大江の瀆に、曰ふ怪物有り。蓋し常鱗凡介の品彙匹儔に非ざるなり。其の水を得るや、風雨を變化し、天に上下すること難からざるなり。)

自分を「怪物」に例えてその能力をアピールする。このくだりは『莊子』に基づくことが指摘されている。

(P)北冥有魚、其名為鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而為鳥、其名為鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而

飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則將徙於南冥。南冥者、天池也。(北冥に魚有り、其の名を鯤と為す。鯤の大なる、其の幾千里なるを知らざるなり。化して鳥と為らば、其の名を鵬と為す。鵬の背、其の幾千里なるを知らざるなり。怒して飛べば、其の翼 垂天の雲の若し。是の鳥や、海運れば則ち將に南冥に徙らんとす。南冥は、天池なり。)(『莊子』逍遙遊)

続いて冒頭の「水を得る」という表現を受けて、「怪物」があとわずかの所で水に到達できないために、その能力を発揮できないことを述べる。

其不及水、蓋尋常尺寸之間耳。無高山大陵曠途絶險為之関隔也。然其窮涸不能自致乎水、為獼獼之笑者、蓋十八九矣。(其の水に及ばざるや、蓋し尋常尺寸の間のみ。高山大陵、曠途絶險の之が関隔を為す無きなり。然れども其の窮涸し自ら水に致すこと能わず、獼獼の笑ひと為る者、蓋し十に八九なり。)

これは自分が博学宏詞科に合格するまであと一步の所まできていることを例えている。このくだりは『莊子』の「轍鮒の急」の故事が典故として指摘されている。

(M)車轍中有鮒魚焉。……対曰、「我、東海之波臣也。君豈有斗升之水而活我哉。」(車轍の中に鮒魚有り。……「鮒魚」対へて曰く、「我は東海の波臣なり。君豈斗升の水有りて我を活かすか」と。)(『莊子』外物)

続いて、哀れみを乞いたい気持ちとプライドが許さない気持ち「怪物」の中で交錯している様子を、次のように述べる。

然是者也、負其異於衆也。且曰、爛死於沙泥、吾寧樂之。若俛首帖耳搖尾而乞憐者、非我之志也。(然れども是の物や、其の衆に異なることを負み、且つ曰く、沙泥に爛死すとも、吾寧ろ之を樂しまん。首を俛し耳を帖れ、尾を揺がして憐れみを乞ふが若き者は、我の志に非ざるなり、と。)

ここでも『莊子』に基づく表現が用いられている。

(P)莊子持竿不顧曰、「……此龜者、寧其死為留骨而貴乎。寧其生而曳尾於塗中乎。」……莊子曰、「往矣。吾將曳尾於塗中。」(莊子竿を持して顧ずして曰く、「……此の龜は、寧ろ其の死して骨を留めて貴きを為さんか。寧ろ其の生きて尾を塗中に曳かんか」と。……莊子曰く、「往け。吾將に尾を塗中に曳かんとす」と。)(『莊子』秋水)

この作品は、その要所に『莊子』に基づく言葉が配されて全体が構成されている。「争臣論」「上宰相書」が經書の言葉を敷衍させる構成になっていることは前項で述べた。「応科目時与人書」はそれぞれ異なるエピソードを引用しており、さらに工夫が凝らされていると言えるだろう。韓愈の初期文章作品における創作上の工夫について考えるとき、『莊子』が經書とほぼ同等の重みを持つ

つていたと言える。『莊子』に注目することで、韓愈の文章に対する読みが深まるのである。

四、韓愈文学の原点

(1) 対象を描き尽くそうとする姿勢

「画記」ははじめに絵に描かれた人物の様子を列挙して、「而莫有同者焉」（而して同じき者有ること莫し）と述べ、続いて馬の様子を列挙した後に、再び「而莫有同者焉」と述べる。さらに続いて馬以外の動物や器物を列挙して、「皆曲極其妙」（皆曲に其の妙を極む）と結ぶ。ここには手放すことになった絵に描かれている事柄を残さず書き留めてやろう、という強い意欲がうかがえる。

このような姿勢は韓愈の後の作品にも受け継がれており、「南山詩」^⑨では終南山の頂上からの眺めを描くのに、「或：若……」（或いは……若し）という形が、途中少し形を変えながら六十句にわたって繰り返される^⑩。対象を描き尽くそうとする姿勢を韓愈が早い時期から持っていたことが、「画記」という作品によって確認できる。

(2) 『莊子』の受容

韓愈が早い段階から『莊子』の文章表現や着想を積極的に取り入れていたことはすでに論じた通りである。韓愈自身が『莊子』に言及した「送孟東野序」「進学解」

はそれぞれ貞元一七年（八〇一）、元和八年（八一三）の作であり、韓愈が後年に至るまで一貫して『莊子』を高く評価していたことがわかる。

(3) 墓誌銘の原点

「猫相乳」の修辞面における特徴はすでに詳しく検討した。この作品はエピソードから説き起こして相手の人格を称えるという構成になっており、この構成は後の墓誌銘に受け継がれている。韓愈が墓誌銘にこのような手法を用いていることは吉川幸次郎氏以来指摘されているが、その原型がすでにここに見られる。同様の構成は「河中府連理木頌」にも見られ、韓愈が早い時期からこのような手法を得意としていたことが確認できる。次に冒頭部分を引用する。

司空咸寧王尹蒲之七年、木連理生于河之東邑。野夫来告、且曰、「吾不知古、殆氣之交暢也。」維吾王之徳、交暢者有五、是其応乎。（司空咸寧王、蒲に尹たるの七年、木理を連ねて河の東邑に生ず。野夫来りて告げ、且つ曰く、「吾古を知らず、殆ど氣の交暢するならん」と。維れ吾が王の徳は、交暢する者五有り。是れ其の応か。）

「連理木」とは二本の木の木目が合わさったもので、土地の支配者が善政を行うとその領地に生えるといわれる。黄河の東の村に連理木が生えたというエピソードから説き起こして、咸寧王・渾・の人徳を称える構成にな

っている。

(4) 文学論の萌芽

「上賈滑州書」は当時の義成軍節度使・賈耽に引き立てを求めた書簡であり、次の書き出しで始まる。

愈儒服者、不敢用他術干進。又惟古執贄之礼、窃整頓旧所著文一十五章以為贄、而諭所以然之意於此曰、
 豊山上有鐘焉、人所不可至、霜既降、則鏗然鳴。蓋氣之感、非自鳴也。(愈は儒服の者にして、敢へて他の術を用て進むことを干めず。又古の贄を執るの礼を惟ひ、窃かに旧著す所の文一十五章を整頓して以て贄と為して、然る所以の意を此に諭へて曰く、
 豊山の上に鐘有り。人の至るべからざる所なり。霜既に降れば、則ち鏗然として鳴る。蓋し氣の感ずるにして、自ら鳴るに非ざるなり。)

自分は儒者でありますから、他の方法は用いず、古礼に則つた方法でご挨拶申し上げます、と前置きした上で、このようにする理由を豊山の鐘に例えている。「豊山の鐘」は『山海経』に見える。

(A) 又東南三百里、曰豊山。……有九鐘焉。是知霜鳴。

(又東南三百里、豊山と曰ふ。……九鐘有り。是れ霜を知りて鳴る。)(『山海経』中山経)

続いて賈耽の人徳を称え、さらに次のように続ける。

是宜小子刻心悚慕、又焉得不感而鳴哉。(是れ宜しく小子 心に刻みて悚慕すべし。又焉ぞ感じて鳴ら

ざるを得んや。)

はじめに豊山の鐘が霜の氣に「感じて鳴る」という典故を引いて、韓愈自身が賈耽の人徳や業績に「感じて鳴る」と述べているところに表現上の工夫が見られる。人間の感情を「鳴る」と表現する発想は、「不平の文学論」として有名な「送孟東野序」において次のように受け継がれている。

大凡物不得其平則鳴。草木之無声、風撓之鳴。……其於人也亦然。……秦之興、李斯鳴之。漢之時、司馬遷・相如・揚雄、最其善鳴者也。(大凡そ物其の平を得ざれば則ち鳴る。草木の声無きも、風之を撓めば鳴る。……其の人に於けるや亦然り。……秦の興るや、李斯之に鳴る。漢の時、司馬遷・相如・揚雄は、最も其の善く鳴る者なり。)

はじめに物が外部から刺激を受けて「鳴り」、次に人間が文学で「鳴る」という発想は「上賈滑州書」と同じである。「不平の文学論」の発想の原点をここに見いだすことができる。

この時期の作品の中で、後の文学論の元になっている発想が他にも見られる。

「上宰相書」では君子が人材を取り立てる際の心構えを次のように述べる。

言君子之於人才、無所不取、若舟之於物、浮沈皆載之云爾。(言ふところは君子の人材に於けるや、取らざる所無きこと、舟の物に於けるや、浮沈皆之を

載するが若しと爾云ふ。）

ここでは次の典故をふまえている。

(O) 舟者、沈物亦載、浮物亦載。喻人君用士、文亦用、武亦用、於人之材、無所廢。(舟は、沈む物も亦載せ、浮ぶ物も亦載す。人君 士を用ふるに、文も亦用ひ、武も亦用ひて、人の材に於ける、廢する所無きに喩ふ。)(『毛詩』小雅「菁菁者莪」鄭玄箋)

この発想は、後に文学論として次のように展開されている。

氣、水也。言、浮物也。水大而物之浮者、大小畢浮。氣之与言猶是也。氣盛、則言之短長与声之高下者皆宜。(氣は、水なり。言は、浮ぶ物なり。水大にして物の浮ぶ者、大小畢く浮ぶ。氣と言と猶ほ是のごときなり。氣盛んならば、則ち言の短長と声の高下する者と皆宜し。)(「答李翊書」、貞元一七年作)

「贈張童子序」では、張童子への戒めの言葉として次のように述べる。

雖然、愈將進童子於道、使人謂童子。求益者、非欲速成者。(然りと雖も、愈、將に童子を道に進めんとして、人をして童子に謂はしむ。益を求むる者は、速やかに成るを欲する者に非ず、と。)

ここでは『論語』が典故として指摘されている。

(A) 子曰、吾見其居於位也。見其与先生並行也。非求益者也。欲速成者也。(子曰く、吾、其の位に居るを見たるなり。其の先生と並び行くを見たるなり。益

を求むる者に非ざるなり。速やかに成らんことを欲する者なり。)(『論語』憲問)

この発想も後の文学論に取り入れられている。

將蘄至於古之立言者、則無望其速成、無誘於勢利。(將た古の言を立つる者に至らんことを蘄めば、則ち其の速やかに成らんことを望む無かれ、勢利に誘はるること無かれ。)(「答李翊書」)

以上見てきたように、後の韓愈文学を特徴づける多くの要素が初期の文章作品中に確認できる。これは韓愈が早い段階から意識的かつ意欲的に古文の研鑽を積んでいたことを、作品の面から裏付けることになるだろう。

おわりに

本稿では、韓愈の初期文章作品を対象として、典故表現に注目しながら詳しく検討を加えた。その結果、従来指摘されていない典故を新たに指摘するとともに、韓愈が典故を持つ言葉を作品中で巧みに利用しており、なかでも『莊子』の繰り返し表現や、寓話を取り入れた文章構成が、その表現や着想において重要な位置を占めていることがわかった。また後の墓誌銘の構成や「不平の文学論」など、韓愈文学の原点ともいえるべき特徴を見いだすことができた。これらの作品は、韓愈の表現者としての強い意欲が十分に感じられるものである。

今後は、今回指摘した特徴が、古文の成熟とともにど

のように発展・変化していくのかを見極めていく必要があり、そのためには作品への深い理解が欠かせないことは言を待たない。作品に込められた工夫を読み取り、韓愈の真意に近づくためにも、典故表現についてさらに精査していく必要がある。

(注)

① 本稿では、韓愈の作品に注を施した書物を広く注釈書と見なした。参照した注釈書は次の通り。

【韓愈の作品のみを扱ったもの】

- (A) 『新刊経進詳補注昌黎先生文集』文謙注、王儔補注 上海古籍出版社 一九九四
- (B) 『音註韓文公文集』(筆者が用いた影印本は無刊記だが、『韓愈全集校注』附録三「参校諸本并引拠要籍叙録」の「宋刊祝充『音注』本」に引く文録堂一九三四年影印本と版式・印記等が一致するので、同一テキストと判断した。)
- (C) 『新刊五百家注音辨昌黎先生文集』魏仲举輯注 上海商務印書館函芬楼依宋本影印
- (D) 『韓集举正』方崧卿撰 汲古書院 二〇〇二
- (E) 『昌黎先生集考異』朱熹撰 上海古籍出版社 一九八五
- (F) 『昌黎先生集』廖瑩中輯注 新興書局 民国五九
- (G) 『唐韓昌黎集』蔣之翘輯注 和刻本漢詩集成七・八 汲古書院 一九七五
- (H) 儲欣『韓昌黎文評点注釈』(羅聯添編『韓愈古文校注彙輯』

国立編訳館 民国九二所収)

(I) 童第德『韓集校註』中華書局 一九八六

(J) 馬其昶校注・馬茂元整理『韓昌黎文集校注』上海古籍出版社 一九八六

(K) 清水茂『韓愈 I・II』筑摩書房 一九八六・八七

(L) 孫昌武選注『韓愈選集』上海古籍出版社 一九九六

(M) 屈守元・常思春主編『韓愈全集校注』四川大學出版社 一九九六

(N) 羅聯添編『韓愈古文校注彙輯』国立編訳館 民国九二

(O) 閻琦『韓昌黎文集注釈』三秦出版社 二〇〇四

【韓愈の作品を含むもの】

(P) 『文章軌範補注』海保漁村補注 漢文大系十八 富山房 一九一四

(Q) 清水茂『唐宋八家文上』朝日新聞社 一九六六

(R) 『唐宋八家文上』沈德潛撰 漢文大系三 富山房 一九一〇

(S) 星川清孝『唐宋八家文読本一』新釈漢文大系 一九七六

(T) 高步瀛『唐宋文學要』上海古籍出版社 一九六三

(U) 横山伊勢男『唐宋八家文上』学習研究社 一九八二

(V) 笈文生『唐宋八家文』角川書店 一九八九

(W) 孫望・郁賢皓主編『唐文選』江蘇古籍出版社 一九九四

(X) 高文・何法周主編『唐代文選』人民文學出版社 一九九七

(Y) 高海夫主編『唐宋八大家文鈔校注集評』三秦出版社 一九九八

② 注①(M)参照。

③ 本文の引用は『韓昌黎文集校注』(注①(J)参照)によった。

- ④ 特に博学宏詞科の答案（「省試顔子不式過論」と「省試学生代斎郎議」）が韓愈にとって不本意なものだったことは、韓愈自身が「答崔立之書」において、「退自取所試讀之、乃類於俳優者之辞。顔忸怩而心不寧者数月。」（退きて自ら試みらるる所を取りて之を読むに、乃ち俳優の者の辞に類す。顔忸怩として心寧からざること数月なり）と述べていることからわかる。これは主に論理の整合性について述べたものと思われるが、修辞面でもあまり効果的な工夫は見られないようである。
- ⑤ 林田慎之助氏は、「韓愈の散文表現論」（『中国中世文学評論史』創文社一九七九）で、時期や作品は特定されていないが、「新しい表現の工夫」の例として、「雅語のなかに俗語を雑え」と指摘されている。
- ⑥ 「画記」を取り上げて工夫を指摘した論文に、高橋君平「韓文二則」（『近代』十九一九五七）、川合康三「韓愈の文学様式探求の試み——「画記」分析——」（『終南山の変容 中唐文学論文集』研文出版一九九九）、および拙論「韓愈の古文運動実践に関する一考察——画記を題材に——」（『中国学研究論集』第十四号 広島中国学会 二〇〇四）がある。
- ⑦ 「画記」については、高橋君平前掲論文（注⑥参照）に、「句の字数を或は増し或は減じ、極力同型句、対句を斥ける」、川合康三前掲論文（注⑥参照）に、「文章にはしばしばリズムの転換がある」などの指摘がある。
- ⑧ 「韓愈の文」（『吉川幸次郎全集』第一一卷 筑摩書房 一九六八）。
- ⑨ 林田慎之助氏は、「韓愈における発憤著書の説」（『中国中世文学評論史』創文社一九七九）において、「総体的にいつて、韓愈の文章は典故をつかうことは少ないが、典故をつかうことがあっても、常識をこえた典拠をもとめないし、それだけにわざとらしい工夫の迹がない」と指摘されている。
- ⑩ 孫昌武『韓愈選集』（注①(L)参照）に、「此暗用……周姜尚釣於渭浜事。」（これは暗に呂尚が渭水のほとりで釣りをした故事を指す）とある。孫氏は具体例を挙げていなので、確認のため一例を挙げた。
- ⑪ 例えば孟浩然「題張野人園廬」（『全唐詩』一六〇）に、「耕釣方自逸、壺觴趣不空。」（耕釣方に自ら逸にして、壺觴趣空しからず）とあり、元結「送王及之容州序」（『全唐文』三八一）に、「乾元初、漫叟浪家於灤溪之浜、以耕釣自全而已。」（乾元の初、漫叟は浪して灤溪の浜に家し、耕釣を以て自ら全くするのみ）とある。
- ⑫ 孫昌武『韓愈選集』（注①(L)参照）で「耕於寬閑之野」の句を皇甫湜『高士伝』の「（許）由於是遁而耕於中岳潁水之陽、箕山之下。」（由、是に於いて遁れて中岳潁水の陽、箕山の下に耕す）に基づくとするのは、当たらないと思う。
- ⑬ 「争臣論」で用いられている典故については、『文章軌範補注』（注①(P)参照）に詳しく指摘されている。
- ⑭ 「莊周以其荒唐之辞鳴。」（莊周は其の荒唐の辞を以て鳴る）とある。
- ⑮ 「下逮莊・騷。……先生之於文、可謂閱其中而肆其外矣。」（下は莊・騷に逮ぶ。……先生の文に於ける、其の中を閱おほいにして其の外を肆にすと謂ふべし）とある。

- ⑩ 清水潔「韓愈の文学における諧謔とユーモア」(『懷徳』三二一九六一)に、「莊子の寓言滑稽の筆致は韓愈の大いに学ぶところであつたと見てよい」、松本肇「韓愈—主情性の文学」(『加賀博士退官記念文史哲論集』講談社 一九七九)に、「莊子における怪奇的な表現こそが韓愈の関心を惹いたのだとは言えないだろうか」と、韓愈と『莊子』との関連の可能性について推測しているが、どちらも具体例を挙げて論じていない。
- ⑪ これらの言葉の中で典故が指摘されているものは次の通り。
○父父子子、兄兄弟弟：(K)○雍雍：(K)『毛詩』、(M)『礼記』○愉愉如也：(K)。
- ⑫ 前掲(注⑥) 拙論参照。
- ⑬ 錢仲聯集積『韓昌黎詩繫年集積』(上海古籍出版社 一九八四) 卷四。
- ⑭ 川合康三氏は「終南山の変容」(注⑥参照)において、「南山詩」の制作意図について「自分自身の経験、見聞に即しながら、終南山のすべてをことばによって描き尽くそうとする意図を示すものにはかならない」と指摘している。
- ⑮ 注⑭および注⑬参照。
- ⑯ 前掲論文(注⑧参照)に、「その人の一生を叙するに当って、その一生なり性格なりを象徴すべき挿話的な事件をとりあげ、それに描写を集中して、その人となりと生涯を、暗示せんとする方法である」とあり、また清水茂『唐宋八家文 上』(注①(Q)参照)に、「韓愈の墓誌銘は大ていそうした印象的な事件にスポットライトをあてて書かれる」との指摘がある。